

よさこいに魅せられて
鶴瀬の秋の風物詩を創り出すパワー



関口真以さん

黒木さんといふたら、伊豆陥落 十二三☆
ふじみのサポートー（事業をサポートする市民



のむらとおるさん

おもちゃからお神輿まで
みこし

技術を活かす「縁の下の力持ち」



野口正時さん

特集 『文化の秋』

支える 文化 人たち

11月3日は「文化の日」です。つるせ西だより編集委員会では、日ごろこの地域の文化的な活動を支えてくださっているたくさんの方々の中から、今回は3人の方にお話を伺いました。

A row of three hand-drawn autumn leaves. From left to right: a red maple leaf with five lobes; a yellow ginkgo leaf with two distinct lobes; and an orange maple leaf with five lobes.

ある4年ほど前のことだった。

そのころの西地域はお祭りも減り、このままでは寂しくなるばかりという話が出ていた。鶴瀬駅と川越街道を結ぶ新しい道路の完成を機に「その道路でよさこい祭りをやろう」「商店街の活性化を目指せ」し提案。平成18年夏の第1回田のよさこい祭り開催につながった。

祭りでは、関口さん自身は踊りには加わらず、監督に徹する。衣装、振付、音楽は毎年変わる。衣装はプロのデザイナーでもある関口さん自らがデザイン、生地選定、縫製まで行う。音樂と踊りはプロの作曲家、振り付け師として全国的に活躍する島子さんの侑矢氏によるもの。

そんな祭りも今年で13回目。「ご苦労が多いでしょう、と伺ったところ、「たくさんあります」と、商店街、町会の皆様のご協力に支えられて

ボランティア）、鶴瀬西交流センターの縁日やフェスティバルへの参加……といったさまざまな活動が思い浮かんだ。

「原点はどこですか」と伺うと、65年前にさかのぼるという。国立近代美術館の鑑賞団体「友の会」が立ち上がったとき参加した。高校生だったので、みんなにかわいがられ、全国あちらこちらへ連れて行ってもらひ陶芸に魅力を感じたとき。

鶴瀬西に移り住み、スナックや居酒屋で酒を酌み交わし、陶芸サークル「無の会」を立ち上げた。44年前のこと。富士見の土、富士見の林の木を燃やして作った釉薬^{ゆく}を使うことだわりがあつた。同じころ俳句も始め、公民館に通つた。手法は違うが自分の思いを形にしていく、それがさまざまな活動へと発展していった。

「野村さんにとって文化とは」と伺うと、普

リニックふじみ」や「パソコン相談室」のサポーターとしても活躍されている。鶴瀬西交流センターの縁日やフェスティバルにも役員として参加された。

東京都の出身で84歳。定年後、田畠仲間に誘われて西公民館に出入りしたのが始まりとか。大変謙虚で物静かな方、現役時代は光学系企業の営業マンとして全国を奔走したこと、ちょつと信じられなかった。

地域での活動の原動力は何か。強いこだわりと信念、プライドがあつてかと心情を伺うと「好きだからやっているだけ」と、いとも当然のことく答えられた。なかなか容易にできることではないと思う。野口さんは隠れた地域の貢献者ともいわれているが、これから交流センター



力強い演舞が披露されるよさこい祭り



西交流センターフェスティバルの中の「新米のつかみどり」は子どもたちにさまざまな体験をと願っての企画だった



製作したお神輿は今年も祭りを盛り上げた